

## ハイデルベルク信仰問答講解説教 10 「愛の確信」(2011年10月9日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

あなたの重荷を主にゆだねよ／主はあなたを支えてくださる。主は従う者を支え／とこしえに動揺しないように計らってくださる。(詩編 55 : 23)

だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。「わたしたちは、あなたのために／一日中死にさらされ、／屠られる羊のように見られている」と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛して下さる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。(ローマ 8 : 35-39)

## 【説教】

今日は、第10主日のところ、問27-28をご一緒に読んでまいります。ここも前回の問答、問26と同様、使徒信条の「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」この告白についての問答になります。特にここでは「摂理」ということが言われます。このことはすでに問26でも言われておりました。答の部分に「天と地とその中にあるすべてのものを無から創造され、それらを永遠の熟慮と摂理とによって今も保ち支配しておられる」とあります。ですからこの信仰問答におきまして「天地の造り主を信ず」という告白は、徹頭徹尾、神さまの摂理を信じるという信仰によって貫かれているということが言えます。

前回の説教でも強調しましたが、ここではもちろん創造信仰が言われているわけではありますが、単に世界の創造主としてだけ神さまを見ているわけではありません。その創造主であるお方は、御子イエス・キリストによってわたしたちの神さまであり、父である。そしてわたしたちはキリストによってその子とされているという関係がある。神さまがこの愛の交わりへとこの世界を創造されていることが重要なであります。そしてこのことが今日の摂理という教えの根底に流れております。

摂理という言葉は、ほとんど日常において聞かれることはありません。これはむしろ教会において用いられる言葉と理解してよいでしょう。ただこれが正しく受け止められているかと言えば、少し心もとないところがあります。「これは神さまの摂理ですね」と言うのと、何か運命的な、宿命的な印象で受け取られることがあります。運命、宿命というのは、それがあらかじめ決定されているもので、何をどう努力しても仕方が無いというもの。受け入れるしかない。当然そこにはあきらめが生じます。これが運命なら仕方が無いと。そういう押し付けられたものとしての人生。それが運命、宿命というものです。

神さまはわたしたちの人生をそのように無理矢理、何か決まったレールの上に押し付けているのでしょうか。わたしたちはその決まったレールの上をただ突き進んでいるのでしょうか。全自動洗濯機があります。スタートボタンを押せば、決まった行程を進みやがて脱水、今は乾燥まで一気にしてしまうそうです。わたしたちの人生もそうやって決まった行程を進んでいくだけなのでしょうか。でもそういう味気のない、無機質な人生観というものがある。それが時としてわたしたちを支配してしまうことがあります。どうせこれが運命だ。運命だから仕方が無い。そうやってあきらめること。利他的になる。

では、摂理を信じるということはどういうことでしょうか。そこでまず問28を見ていただきたい。これがあきらめでしょうか。これは人生をあきらめているような生き方ではありません。三つのことが言われます。「忍耐」「感謝」「確信」これだけ前向きな人生がわたしたちには与えられるのです。しかもそれは神さまの摂理を信じることによって与えられるというのです。

「神の創造と摂理を知ることによって、わたしたちはどのような益を受けますか」益を受けると言います。これは誤解していただきたくないのは、いわゆる「ご利益」のことではありません。ご利益は自分に都合のよい益のことでしょう。だからここでは神さまを信じたらこういうご利益がある、そう言って信じさせているわけではないのです。この「益」というのは、実際の生活の中で、神さまの恵みを深く経験するということです。そこには逆境もありますし、順境もあります。決して自分に都合の良いことばかりではない。でもその人生に起こるすべてのこと、逆境においても順境においても、どんなときでもそこで深く恵みを教えることができるのということです。それがわたしたちの人生を本当に「益」とするものなのです。決して人生をあきらめない。そういう生き方を可能にする。それが摂理を信じてこどと信仰問答は教えています。

では改めてその摂理とは何でしょうか。そこで問27を見ます。「神は天と地とすべての被造物を、いわばその御手をもって今なお保ちまた支配しておられる」とあります。神さまはこの世界を創造されただけでなく、これを今なお保ち支配しておられるというのです。それは先ほどの運命、宿命とは違います。例えば、先ほどの譬えで、全自動洗濯機のボタンを押したら、決まった全行程を進んで、最後自動的に終わる。それは決まったレールの上を進む運命、宿命です。しかしこの世界もそのように、その最初のスイッチは神さまが押されたけれども、あとは定められた行程を終わりに向かって自動的に進んでいるということでしょうか。造ったら、それはもう神さまの手を離れてしまうのか。そうではない。「御手をもって今なお保ちまた支配しておられる」そこには絶えず神さまの御手が働くというのです。そのようにして世界は保たれ支えられている。

御手をもって働くということは、絶えずそこに神さまの御心があるということでしょう。わたしたちが手を動かす時には、そこにわたしたちの意志が働きます。そのように神さまの御手が働くところに神さまの御心があるのです。そのようにわたしたちの世界、わたしたち一人一人の人生に神さまの御手が働き、これを保ち支配しておられる。自動的に決まった行程を進むのではない。そこにはいつも神さまの御心が働きます。その御心に沿って人生が導かれていく。それが摂理を信じるということです。

では、神さまの御心とは何でしょうか。それは御言葉、福音においてわたしたちに啓示された神さまの救いの出来事であり、それは言い換えれば、キリストによって与えられた罪の赦しと永遠の義と救いでもあります。それによってわたしたちが神の子と回復されることです。神さまの御心は絶えずそこに向かっています。あの創世記の墮罪物語にあるように、人間は罪を犯して、神さまの御心から外れてしまいました。しかし神さま

はそのお造りになられたものが、その御心から外れていることをそのまま放置なさいません。この人間を御心に適う者として回復させられる。そこまできちんと責任をもってくださるので。それは神さまが人間を創造されたからです。人間を造られた神さまはそのお造りになった人間に対して責任があるのです。人間をあつ「極めて良かった」と言われた祝福された人間へと回復させる。そして再び御自身との生きた交わりの中へ招き入れてくださる。

そのために神さまは愛する独り子イエス・キリストをお与えになられました。そこには神さまの愛があります。「神は、独り子をお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました」(Iヨハネ4:9) 神さまの御心とは人間の救いであり、そのために御子を与えられた神さまの愛であります。その御心をもって神さまはわたしたちの人生を保ち支配されるのです。そのように信じる時に、わたしたちは大きな支えを得るのではないのでしょうか。人生の真ん中に決して動かされないう大きな支柱が立つのです。

問答の言葉に「木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も」とあります。これは要するにどのような時も、ということです。人生は良い時ばかりではありません。試練のときがあります。問26でも「たとえこの涙の谷間へ、いかなる災いを下されたとしても」とありました。そういう嘆きの涙を流すこともたくさんあります。しかしそれでも神さまの御心は変わらないとわたしたちは信じる事ができる。どうしてそれが分かるのか。キリストを見れば分かる。キリストは確かにわたしたちに与えられた。そして命をささげてください。それほど確かな愛が注がれているのです。それは揺るぎない事実であります。どのような時も、それでわたしたちは一喜一憂するのではない。神さまの御心は変わらないのです。そしてこの信仰がわたしたちの生き方を決してあきらめない生き方へと変えるのです。

そこで再び問28を見ていただきます。ここに摂理を信じることによって与えられる三つの益が教えられています。「忍耐」「感謝」「確信」。それは単なるご利益、自分に都合の良い益ではありません。「逆境においては忍耐強く、順境においては感謝し、将来についてはわたしたちの真実な父なる神をかたく信じ、どんな被造物もこの方の愛からわたしたちを引き離すことはできないと確信できるようになる」それは「逆境」とありますように、むしろわたしたちの試練の時にこそ発揮されるものではないのでしょうか。例えば、試練によって将来の救いの確信が揺らぐということもあるでしょう。本当にわたしは救われているのだろうか。神さまは本当にわたしを愛しておられるのか。そう考えて真剣に悩むということもあるでしょう。

信仰を持てば、試練はなくなる、悩みはなくなると考えている人が多い。でもそれなら悩みがなくなるために信仰を持つという、それこそご利己的な信仰になってはいませんか。信仰を持てば、逆境には陥らないということはありません。いやむしろ信仰を持つ人が大きな苦難に直面することがあります。病、愛する者との死別、挫折、失敗。信仰者もまたあらゆる苦痛を経験する。でも摂理を信じることは、そこでそれを運命だと言ってあきらめてしまうことではない。なお試練の中でも恵みを与え、揺るがない救いの確信を持ち続けるということです。

「忍耐」とあります。これはキリスト者の持つ徳目として常に教えられていることです。特に新約聖書の書簡では、この「忍耐」が繰り返して教えられます。ローマの信徒への手紙第5章に「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」とあります。苦難が希望に至る。その過程に忍耐があります。激しい迫害の中でこのことは切実でありました。皆、信仰を捨ててしまふ。耐えられないのです。信仰を持つがゆえにそのような苦難を経験するようになるのです。信じていられるか。当然そうなります。でも、その先に本当の希望が見えてくるためには、今、この苦難を耐え忍ばなくてはならない。

この「忍耐」ということは、ヒポモネー、何かの下に留まるという意味があります。試練があつても、なおそこに留まり続ける。逃げない。そういう積極的な姿勢がこの「忍耐」にはあります。ただじつと我慢しているということではない。これが運命とあきらめて我慢するのではない。そういう受け身ではなく、むしろそこにあえて踏みとどまる。逃げない。そういう積極的な姿勢があります。教会の言葉でそれを「堅忍」と言います。それはその先の希望を見ているからではないでしょうか。「将来については」と信仰問答は述べています。将来の確信、それは神さまの救いの完成、成就です。それを考えたならば、ここで逃げてしまうわけにはいかない。せっかく信仰を与えられたのに、今の試練でそれを捨てるわけにはいかない。わたしたちには将来に対する揺るぎない確信がある。キリストによって罪赦され神の国が与えられていること。それは、この世のどんな苦しみによつても動かされることはない。神さまの御手がしっかりとわたしの人生をつかまえておられるのです。

どうしてそれが分かるのでしょうか。キリストを見れば分かるのです。ローマの信徒への手紙第8章のところを読みませう。ここは今日の問答の根拠となる御言葉であります。「この方の愛からわたしたちを引き離すことはできない」それは裏を返せば、引き離されたと思わせるような現実があるということでしょう。でもそれでも引き離すことはできないと確信するということです。それはなぜか。引き離されたと感じるその時に、わたしたちはそこにキリストの十字架のお姿を見るのです。キリストもまた引き離された。十字架で死なれた。わたしたちと同じ苦しみでキリストがおられる。引き離されたと思ったところになお神さまの御手は働いている。何が無くなつても、最後に神さまの御手はそこにある。キリストを見ればそれが分かるのです。それがわたしたちを信仰に留まらせる。忍耐へと強めるのです。それはあきらめではありません。救いに向かつての積極的な生であります。そのような歩みへと摂理の信仰はわたしたちを導きます。祈りをささげましょう。

天の父。信仰の弱いわたしたちです。逆境のときはあなたを疑い、順境の時でさえ感謝を忘れる。わたしたちの中には何一つ確かなものはありません。ただあなたの変わらない愛だけがそこにはあります。キリストによって示されたあなたの愛に留まり続けることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。